

アカデミック・ジャパニーズにおける読解力

— 二つの読解試験分析を通して —

伊東祐郎・横田淳子・福岡理恵子・高野愛子

(2008. 10. 31 受)

【キーワード】 テキスト、論の把握、スキーマ、予測、推論

1. はじめに

本学の留学生日本語教育センター（以下「センター」）では、日本の大学学部進学を目指す留学生に対して、1年間の集中予備教育を行っている。この教育プログラム（以下「1年コース」）における最終目標は、学部進学後に必要とされる日本語運用力を身につけさせることにある。センターでは、近年、教育プログラムの最終目標を明らかにし、日本語学習段階別の目的と教育内容を記述化するために、「JLC 日本語スタンダード」（JLCは留学生日本語教育センターの英語名の略：JLC = Japanese Language Center）の構築に取り組んできた。このスタンダードは、学部進学後に求められる、いわゆる「アカデミック・ジャパニーズ」（以下「AJ」）をカリキュラムの目標として改めて明確化し、教育目標や教育内容等を明示したものである。これによって教師や学生双方が学習教育内容と評価の方法を共有し、学習教育目標を達成することをねらいとしている。

センターにおいて、2007年度末1年コースを修了する学生に対して、JLC日本語スタンダードで示された教育目標や教育内容に基づいて作成した修了試験（以下「JLC 試験」）と、これまでの学習項目に基づいて作成した学期末修了試験（以下「期末試験」）を実施したところ、両者の試験の結果に明らかな違いが見られた。本稿では、二つの試験結果および試験そのものの分析から、両試験における特性の違いを探求するとともに、AJとしての読解力を明らかにすることを目的とする。合わせて、読解力を測定するための望ましいテストのあり方についても考察する。なお、本論中の「試験」「テスト」は断りが無い限り同義として扱う。

2. 読解力とは何か

読解とは、文字で書かれた情報を読んで理解することである。読解過程において

は、言語入力データを受けて低次の具体的レベルからより高次の抽象的レベルへと次々と処理していく **Bottom-up** リーディング (ボトムアップ処理) と、入力データを過去の知識や一般的な概念・知識から予測することによって高次レベルから低次レベルへと処理していく **Top-down** リーディング (トップダウン処理) とが相互作用的に情報を処理しているとされている (『新版日本語教育事典』)。一般生活で読むものは、新聞、手紙、小説やレポート、論文など多種多様であるが、構成度の高い読解テキストの方が理解されやすいとされている。なぜなら、内容が記憶に定着されやすいからである。

読解力を構成する要素としては、以下のものが挙げられている (Scarcella and Oxford, 1992)。

文法能力：読解力とは、書かれたものを解読できる能力で、文字が認識できることが前提となる。日常生活で目にする日本語文は、すべて平仮名で書かれているわけではないので、漢字仮名交じり文を抵抗なく読める基礎力が必要になる。それと共に一連の文章を目にしたときに、文の構造を理解するための文法規則も不可欠である。特に複文などにおける修飾関係や、談話の流れの方向づけにかかわる接続関係などの理解力は、文の構造が理解できるかにかかわってくる。それと共に、文を構成している語彙力は読解活動に影響を与える。

社会言語学的能力：読解力には、読解テキストのテーマやそのジャンル、また文章スタイル、書き手の思いや意図などの背景知識が欠かせない。与えられた文中の文型がわかり、語彙が理解できたとしても、テーマがわからなければ読解活動を効率よく機能的に行うには限界がある。読み物の種類によっては、高度な背景知識や社会言語学的な能力がないために、内容が少しも理解できないということも起こり得る。

方略的能力：情報を得るために読むわけであるから、必要な情報を効率よく検索できるスキルが必要となる。読む目的に応じて、スキミング (情報を探して拾う読み方)、スキミング (大意をつかみとる読み方) など読み方を変えることも読解力のひとつになる。また、わからない単語や表現が出てきたときに、前後の文脈から推測しながら読み進むことも重要である。

談話能力：読解は推測活動だと言われている。書かれたものから内容の展開を効率よく推測し読み進んでいくには、背景知識とともに、文章の接続関係を理解しなければならない。それによって談話構造を予測することが可能になる。テーマとの関連性や文章全体の結束性、一貫性が認識できることも、読解力を構成する要素の

ひとつとなる。

3. 読解試験の特性とは何か

言語テストの機能は、本来、学習者が習得した知識や能力を測定する役割を担っている。そのために、テスト開発においては、測定しようとする言語知識や言語運用力を明らかにして、それらを適切に測定および評価できるように設計されていることが望ましい。ここでは、テスト作成における課題に関する先行研究をまとめておきたい。

言語テストにかかわる研究においては、まずテスト方法についての研究がある。中でもテストの難易度に焦点をあてた研究では、テストの難易度を左右する要因には、「読解テキストの難しさ」と「設問内容の難しさ」の2つを挙げている。前者は、受験者がテストの中で与えられる文や文章である。後者は、文や文章を読んだ後にそれらの内容について取り組む設問文である。Alderson (2000) は、読解テストの難易度はこれらの要因によって決められることが多いとしている。その中で、易しい読解テキストであっても設問がむずかしくったり、難しい読解テキストであっても設問がやさしくたりすることがあるので、テストの項目分析においては、どのような要因が起因しているかを見極めることが重要であると指摘している。そして、設問文は、読解テキスト本文よりやさしい表現であるべきであると助言している。

Pearson と Johnson (1978) は、設問文には次のような3つの種類があると述べている。①テキスト内明示質問 (textually explicit questions) : 質問内容と正答が同一文に含まれているもの、②テキスト内暗示質問 (textually implicit questions) : 正答を得るには複数の文を読まなければならない質問、③スクリプト中心質問 (script-based questions) : 正答は読解テキストには含まれておらず、読解テキストの内容を受験者の既有知識や背景知識と関連づけさせて答えさせる質問、である。上記の①を局所質問 (local questions)、②を全体質問 (global questions) とも呼んでいて、前者は後者より易しい質問であるとしている。

Davey (1988) は、設問文の種類を構成する要因には、必要な情報がどこにあるかという点と、推測・推論する内容が何であるかの2点を挙げている。また、四肢択一解答形式においては、選択肢の長さ、選択肢で提示される語句や文の種類、正答の長さ、錯乱肢のもっともらしさなどが影響するとしている。そして、推論とそのための情報の位置が密接に関係しているので、Davey はテスト項目の難易度は、部分的にも正答を得るための推測・推論の度合いが影響することになると言っている。

る。正答が文中に明示されていないような設問では、受験者は、可能な限りの推論をすることになる。したがって、推論が必要な設問では、受験者には受験ストラテジーや課題解決能力が求められることになると述べている。

4. JLC 試験と期末試験の結果

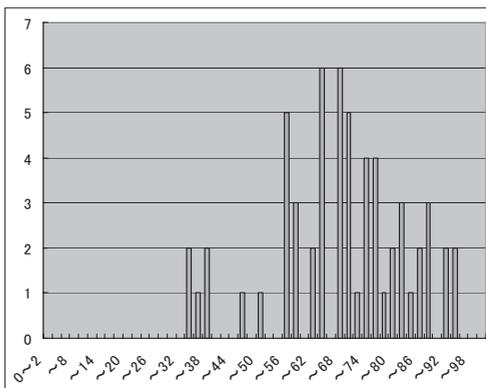
2007年度末、1年コースに在籍した留学生を対象に上記2つの読解テストをほぼ同時期に実施した。その結果、JLC 試験と期末試験の両者において、得点分布に違いが見られ、このことから、両者の試験は異なる読解力を測っているのではないかとこの疑問が生じた。二つの試験はどのような能力を測定しているのだろうか。両試験の構成と試験結果の全体像は以下に示すとおりである。

〈表 1〉 JLC 試験「読解」

試験	問題数	設問数	受験者数	最高点	最低点	平均点	標準偏差
JLC	5 題	34 問	59 名	94	33	68.05	14.98
期末	3 題	30 問	66 名	100	38	84.71	12.68

問題数は、JLC 試験が5題、期末試験が3題から構成されている。問題数というのは、読解テキストの数である。解答形式は、両試験とも選択式で記述問題ではなかった。JLC 試験の受験者数が少ないのは、当日欠席者がいたためである。得点結果(100点満点、素点計算)は最高点、最低点ともに両試験に大きな違いは見られなかった。しかし、平均点については、JLC 試験が期末試験より16点ほど低い。標準偏差はJLC 試験の方が期末試験より高く、得点分布の広がり具合の違いが見てとれる。

グラフ1とグラフ2は、両試験の得点分布を示したものである。特徴的なことは、JLC 試験〈グラフ1〉では、日本語能力試験のような熟達度テストに見られる正規分布に近い分布となっている点である。一方、期末試験〈グラフ2〉は、到達度テストの結果に見られるような負に歪んだ分布になっていて、明らかにこれら2つの試験が測定しようとする知識



〈グラフ 1〉JLC 試験得点度数分布

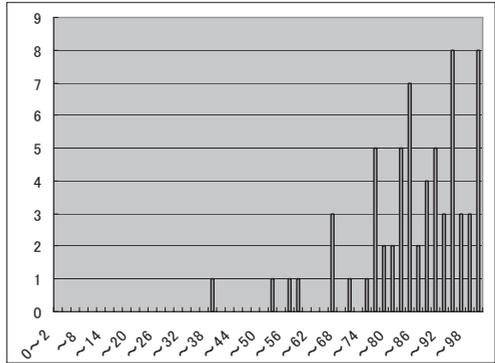
や能力に違いがあると考えられる。

なお、両試験結果の相関係数は、0.63 だった。

5. JLC 試験と期末試験の読解

テキストと設問の分析

なぜ二つの試験の成績が4節のような結果になったかを検討するために、両試験の読解テキストの特性と設問内容を分析した。



〈グラフ2〉 期末試験得点度数分布

5-1 読解テキストの言語的特性

JLC 試験の5つの読解テキストおよび期末試験の3つの読解テキストの総文字数、漢字比率、漢字レベル別比率、語彙難易度を調べ、テキストの言語面における難易度を判断した。

〈表2〉 読解テキスト言語面

読解テキスト	総文字数 (のべ数)	漢字比率 (対総文字数)	漢字レベル別比率 (対総文字数)				語彙難易度 (チュウ太判定)	
			級外	1級	2級	3級		4級
JLC 問題1	677	29.0 %	0.0 %	9.7 %	32.1 %	28.1 %	30.1 %	2
JLC 問題2	1098	24.0 %	0.0 %	8.7 %	40.3 %	30.4 %	20.5 %	2
JLC 問題3	1660	25.7 %	0.0 %	9.4 %	41.0 %	31.4 %	18.3 %	1
JLC 問題4	925	36.2 %	0.3 %	10.7 %	49.9 %	27.2 %	11.9 %	1
JLC 問題5	1606	26.0 %	0.0 %	9.6 %	53.2 %	22.8 %	14.4 %	1
期末問題1	1029	26.4 %	0.0 %	2.6 %	34.6 %	37.9 %	25.0 %	3
期末問題2	1291	34.3 %	0.0 %	7.9 %	54.4 %	19.9 %	6.1 %	1
期末問題3	1181	32.1 %	0.0 %	5.0 %	28.0 %	40.4 %	26.6 %	2

(チュウ太判定) 1 難しい、2 少し難しい、3 ふつう、4 やさしい、5 とてもやさしい

総文字数は JLC 問題1 が一番短く 677 字であり、一番長い JLC 問題3 の 1660 字の半分以下であった。しかし、JLC 問題1 と JLC 問題2 はテキストとしては繋がっているものを長いので便宜的に二つに分けたものであり、論を追って読もうとすると二つのテキストを続けて考えなければならず、1700 字以上のテキストの読解

となる。この点を考えると、JLC 試験は問題4を除いて大体1600字強となり、期末試験と比べて長いテキストであったと言える。期末試験は3問とも1000字から1300字のテキストで相対的に短めであった。

漢字比率はどのテキストも24%から36.2%の間であり、二つの試験に大きな差は見られなかった。漢字の難易度を見るために、日本語能力試験の出題基準のどのレベルの漢字が出現していたかを調べたが、JLC 問題4を除いてどのテキストも1級から4級の漢字でカバーされていた。

テキストに出現した漢字が受験者である1年コースの学生にとって未習か既習かの観点から見ると、期末試験は、テキストそのものは初めてのものであるが、漢字は級に関係なくすべて既習のものである。さらに、基準は明らかでないが、問題1では11の漢字語彙に、問題2では16の漢字語彙に、問題3では10の漢字語彙にルビが振ってあった。JLC 試験では出現漢字が受験者にとって未習か既習かということは一切考慮されず、オリジナルのテキストがそのまま使用された。

テキストの語彙に関しては「リーディング・チュウ太」¹を用いて難易度を調査した。期末試験では、3つの読解テキストが「難しい」、「少し難しい」、「ふつう」と分かれたが、基本的には未習の語は使われていない。使わざるを得ない、「ミシン」「主婦」の場合には英語訳をつけていたので、受験者にとって語彙は難しくなかったと思われる。一方、JLC 試験では5テキスト中、3つが「難しい」、2つが「少し難しい」であり、1年コースの最後の試験としてもかなり未習の語があったと思われる。ただし、論を追う上で必須であると思われる語（「進化論」）には英訳がついている。JLC 試験では、未習語があってもそれにとらわれず文脈から推測しながら全体の論を追っていく能力を読解力の重要な要素と考え、そのような能力を測る問題を作成しているので、未習語があることが直ちに難しい問題とはなっていない。また、未習か既習かは、日本語の授業で学習したかどうかで判断しているが、受験者である学生は日本に滞在し、理系や文系の科目を日本語で学習しているため、未習と判定した漢字や語彙が直ちに難易度に反映されるわけではない。

以上の点から、テキストの漢字と語彙に関しては、両試験の難易度の点で大きな差はないと言える。テキストの長さに関しては、JLC 試験のほうが1.5倍前後長く、必然的に読解の際に要求されるボトムアップ処理とトップダウン処理の相互作用処理に要する時間が長くなり、集中力が続かず処理が難しくなった結果、難度が高く

¹ 日本語読解学習支援システム：文章中の単語と辞書をリンクするシステムで、文章中の単語や漢字の難易度を判定する。

なったと推察される。

文法に関しては、今回は分析するに至らなかったが、期末試験は既習の文法項目を使って読解テキストが作成されている。JLC 試験はオリジナルテキストがそのまま使われており、既習文法事項とのすり合わせは行っていない。

5-2 読解テキストの内容的特性

読解テキストの内容面の難易度を調べるために、それぞれのテキストについて二つの観点から内容を検討した。一つはテーマが具体的であるか、抽象的であるかである。具体的なテーマのものはイメージが掴みやすいため意味の把握が容易になるが、抽象的なテーマのものは具体的なイメージが結びにくい分、言葉だけで意味を把握していかなければならず高度な読解力が要求されると考えた。もう一つの観点はよく知られている一般的な内容であるか、書き手の独創的なそれだけによく知られていない内容であるかである。読み手が既に知っている内容であれば、不完全な言語入力データであっても自分が持っている知識や概念から予測ができ、論が追いやすくなるが、書き手の独創的な内容、つまり読み手がまだ知らない内容の場合は予測が難しく言語入力データを丹念に処理していかなければならず、高度な読解力が要求されると考えた。

筆者ら4名が各自8つの読解テキストについて以下のように5段階で点数をつけた。

－2 大変具体的、－1 具体的、0 ふつう、1 抽象的、2 大変抽象的

－2 大変一般的、－1 一般的、0 ふつう、1 独創的、2 大変独創的

結果は、どのテキストについても2段階以上の違いはなく、平均値は表3のようになった。

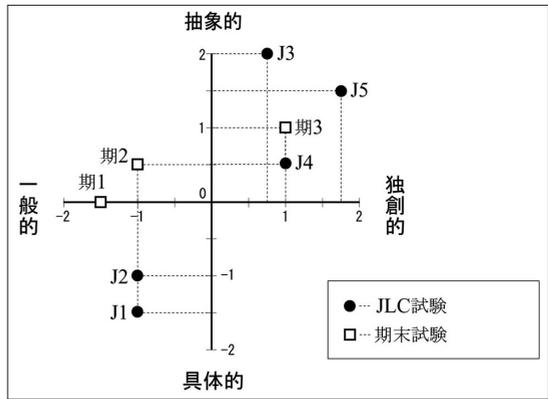
〈表3〉 読解テキストの内容面

テキスト	具体／抽象	一般／独創
JLC 問題1	－1.5	－1
JLC 問題2	－1	－1
JLC 問題3	2	0.75
JLC 問題4	0.5	1
JLC 問題5	1.5	1.75
期末問題1	0	－1.5
期末問題2	0.5	－1
期末問題3	1	1

具体／抽象を縦軸に、一般／独創を横軸にして座標軸をつくり、8つの読解テキストをプロットしてみると〈グラフ3〉のようになった。

内容的には抽象的であればあるほど、また独創的であればあるほど難度は高くなる。すなわち右上にプロットされた読解テキストが多いJLC試験の方が期末試験より内容的に難しかったと思われる。ただし、

JLC試験には左下の一般的かつ具体的と判断されたテキストもあり、難度が高いものから低いものまで並んでいたと言えよう。それに対して、期末試験は読み手が知っている可能性の高いやや抽象的な内容のテキストで構成され、3つのテキスト間の差は少なかったと考えられる。



〈グラフ3〉 読解テキスト内容面

5-3 設問の特性

両試験の設問（JLC試験：34問、期末試験：30問）の特性をPearsonとJohnson（1978）および『日本語能力試験出題基準【改訂版】』（2004）を参考に以下のように分類し、該当する設問数をパーセントで示してみる。

〈表4〉 設問の種類

単位	1文	1段落	1段落	1段落	複数段落	全文	全文	全文
設問の性質	構造・語彙	構造・語彙	論の把握	推論	論の把握	スキミング	主題・論旨の把握	推論
JLC試験	0	0	26.4	2.9	64.7	0	5.9	0
期末試験	10	10	13.3	13.3	0	43.3	6.7	3.3

設問に答えるために要する処理単位を1文、1段落、複数段落、全文の4つに分けた。一般的に処理単位が大きいほど、表4で言えば右に行くほど難度は高くなる。設問の性質は「構造・語彙（指示詞が指すものや1文の言い換えなど）」「論の把握」「推論（読解テキストの内容を読み手が自分の知識と関連付けて答えなければならない

もの)」「スキヤニング」「全文の主題・論旨の把握(スキミング)」に分類した。

JLC 試験では「論の把握」を問うものが圧倒的に多かった。必然的に処理単位も長く、1段落と複数段落を合わせると90%を超えた。トップダウン処理である「論の把握」そのものを読解力とみなして問題作成をしたことがうかがえる。それに対して、期末試験では処理単位は1文から全文まで幅広く、設問の性質もバラエティに富んでいた。ただしJLC試験に見られるような複数段落にまたがって「論の展開」を追って答えを探さなければならないような設問はなかった。期末試験の設問で特徴的なことは、本文の内容と合っているかどうかを問う正誤問題が12問あり、その多くは本文テキスト中に答えがそのままあり、特定の情報を探して全文を拾い読みするスキヤニング能力を測定するものになっていたことである。

以上の点から、JLC試験では読解力を「論の把握」と捉え、その力を問う設問を作成していたのに対して、期末試験では「論の把握」を支えるボトムアップ処理の力やスキヤニング力などを主に測定する設問を作成していたことがわかる。

5-4 選択肢の特性

JLC試験と期末試験の各設問の選択肢について分析をしたところ、以下のような特徴が見られた。

選択肢の構成・形式面を見ると、JLC試験は34問中、四肢択一が31問、二肢択一が3問で、期末試験では30問中、四肢択一が17問、正誤問題が12問、2種類のグループに配置した共通項の5択から選ぶ問題が5問であった。

また、「論の展開を考えなくても選択肢のみで答えられるか」という観点で両試験の選択肢を分析したところ、JLC試験にはそのような設問はなかったが、期末試験では、「選択肢のみで答えられる」と筆者ら4名全員が判断した設問が30問中6問あった。それらは常識で答えられる設問であった。

期末試験に多く設けられていた正誤問題は、速読などの練習で内容を理解しているか判断するためによく用いられ、それ自体有効ではあるだろうが、実際は力のない学習者の場合でも問題を読んでいない場合でも五分五分の確率で正答になってしまうことにもなる。期末試験の場合、その選択肢の文言の多くが本文テキスト中にそのままありスキヤニング能力を測定するものになっていたこと、問題文を読まずに常識などで判断できるものであったことを考えると、期末試験の正誤問題は「論の把握」を測定するものにはなっていなかった。また、その正誤問題だけで全問題の40%を占めていることから、期末試験の方が全体的に難度が低くなった一

因になっていると考えられる。

以上のことから、設問形式とともに選択肢をどのように作成するかが設問の難易度に少なからぬ影響を与えたと考えられる。

6. AJにおける読解力とは何か

AJの記述化を試みた「JLC日本語スタンダード」における読解教育のゴールは、「専門書が読める」「資料が読める」を目指している。そのために、カリキュラムの各段階の行動目標を「論理の展開を予想しながら読める」「多読・速読ができる」「文章全体の構成がわかる」「論理の展開を予想しながら読める」「未習語に対して推測を働かせて読める」「多量の情報から、必要とされる情報を素早く取捨選択できる」「目的意識を持って読める」などの具体的な読解スキルを記述している。

『新版日本語教育事典』によると、読解活動というのは、読み手がスキーマと呼ばれる階層化された知識構造をすでにもっていて、そのスキーマにテキスト情報をあてはめながら能動的にテキストにはたらきかけ、仮説設定と検証を繰り返すものと定義されている。一方、『応用言語学事典』によると、読解とは、文字言語で伝えられたテキストについての解釈を構成するコミュニケーション活動であるとしている。読解は、現象的には、外から与えられた材料を内部に取り込んで意味表象を構成する活動であるとし、認知的過程は、①他者の思想(知識)を共有しようという目標を持つ、②テキストの内容について題や文章の一部から読み手の既有知識が活性化され、テキストの解釈についての予測や仮説が表象される。③表象を言語(音声言語・文字言語)化する。④言語化された表象とテキストの内容とのズレを評価する、⑤ズレを解消するために既有知識が活性化され、読み返しが行われる、という一連の心的過程としてとらえている。読み手が蓄積してきた知識を活用して言語材料の中から必要と思われる情報を選択し、予測を立て、新たな言語材料に照らし合わせつつ、その予測を修正したり、確認したりして、読解を進めているとされている。また、同事典では、「読解における推論」に触れ、テキストの情報に基づいて読み手が背景知識を活性化させて、テキストに明示されていない情報を補う作業であるともしている。語彙・文法や漢字力そのままではなく、それらの力を使いつつ、新たな知識や概念を読み取り、過去の知識や一般的な概念と結びつけて新しくスキーマを作り上げることも必要になり、高度で幅広い認知および思考活動であると言える。

このように、AJの「読解力」とはアカデミックな場で遭遇する専門的なテキスト

を読み解く能力である。読解、すなわち、読み解くということは、読み手が既に持つ内的スキーマを生かし、遭遇したテキストをその内部に取り込んで、新たなスキーマを構築していくという作業である。とすれば、AJの読解力を測定するための試験とは、学生がその一連の作業をすることができるか否かを測るものでなければならない。

7. まとめと提言

JLC試験および期末試験を分析した結果、読解力を測定しようとするテストの設計においては、読解テキストの選択と設問のタスクの設定が重要な鍵をにぎることが改めて明らかになった。この二つが、前節で述べた読解力を測定するポイントとなるからである。これらの視点から、試験作成する際に考慮すべき点を以下に述べてみる。

まず、読解テキストの選択について述べる。これには第5節で検討した「読解テキストの特性」がかかわっている。この特性を構成する要素は、「扱われるテーマの種類」、「文字・語彙の難度」、「テキストの文字数」の3点である。以下、それぞれの観点から選ぶべきテキストの特性を示してみる。

第一は、テキストの内容面、すなわちテーマの種類である。テキストの内容的特性を考察するため、第5節で「一般的－独創的」「具体的－抽象的」という2つの軸を設定した。このうち、試験におけるテキストの適切性と密接に関わると思われるのは、「一般－独創」軸である。アカデミックな場で遭遇するテキストは、既知ではなく、未知の内容を持つものが主となるはずである。従って、試験におけるテキストも、学生にとって未知の内容のテキストが望ましい。よって、読解試験では一般的によく知られた内容は避け、受験者にとって未知の内容と思われるテキストを選ぶべきである。

さらに、このことは、設問の適切性とも大きく関わってくる。内容が「一般的」つまり既知である場合、読み手はテキストを読み解くプロセスを経る必要がなく、内的スキーマのみを用いて解答に至ることができる。極端に言えば、テーマさえ掴めば、後はテキストを読まずとも、ただ選択肢を見るだけで正解できるのである。「一般的」すなわち常識的すぎるテキストの場合、「論の把握」や「推論」を意図した設問も、結果的に「常識を問う」ものになりやすい。

内容が既知であるテキストでは「論の把握」や「推論」という設問が作りやすく、作成しても難度が低くなる。これを回避しようとする、選択肢によって難度を上

げることになり、結果として、学生をいたずらに迷わせる選択肢や、テキスト自体よりも言語的難度の高い選択肢を作成してしまいやすくなる。

第二は、テキストにおける文字・語彙の難度である。AJにおける読解力の一つとして「未習語に対する推測能力」が挙げられる。アカデミックな場で遭遇するテキストが既習の文字・語彙のみで構成されていることはあり得ない。よって、多少の未習語が含まれていても、既知の情報（語彙・文型）から、未知の部分の推測しつつ論を把握していく能力が必要である。したがって、読解テキストに未習語がある程度含まれていることは必ずしも読解を妨げるものではなく、むしろ望ましいと言える。既習語のみで構成されたテキストは、AJにおける読解力の測定には不適切である。

第三は、テキストの文字数である。AJにおいては、多読・速読の能力も求められる。スピード・リーディング能力の測定には、一定量のテキストを一定時間内に読ませることが必要である。言うまでもなく、テキストの量と試験の実施時間・方法に留意することは肝要である。

次に、適切な設問タスクの設定について述べたい。

第2節で見たように、設問には一文中に答えが明示されているような低次レベルのものから、推論が必要な高次レベルのものまで、難度的に段階がある。低次レベルと考えられるものには、処理単位の短いもの、すなわち「語彙・構造」を問うといったボトムアップ処理をさせる設問や、答えが明示されているもの、すなわち、スキヤニングなどが挙げられる。このような設問は、AJにおける読解力から考えると極力割合を少なくするべきである。高次レベルと思われる「論の把握」、「主題・論旨の把握」、さらには全文から論を抽象化し、応用させる「推論」などに関する設問を中心とすべきである。「文法能力」(文字・語彙を含む)や「構造把握能力」は「読解力を構成する言語的要素」であるが、こういった基礎的能力は、高次レベルの設問によって内包的に測定されると考える。

高次レベルの設問の中で特に重要と考えられるものに、「推論」があげられる。ここで言う「推論」とは、テキストの内容を内的スキーマによって抽象化し、そこで得られた新しいスキーマを、他の事象に応用する、という作業である。これはアカデミックな場において最も高度かつ重要な読解作業と言える。ゆえに、読解試験においても、テキストに書かれた具体例を抽象化させる設問や、抽象的な論を具体的な事象に応用する設問などを作成し、その能力の有無を測定しようと試みるべきであろう。これは非常に高次の設問ではあるが、しかし、能力自体は、母語で既に習

得しているものと考えられる。つまり、測られるべきポイントは、この能力を日本語という外国語環境においても発揮できるか、という点にある。先に述べた「基礎的能力は高次レベルにおいて測定される」とは、このような意味を持っている。この点に関しては、「推論」だけでなく、「論の把握」「主題・論旨の把握」など、すべての読解作業について同様に考えられる。

以上、適切な読解試験の設計に関するいくつかの提言を試みたが、AJにおける読解力を正しく測定する試験が開発されれば、読解力養成の指導方法も変わってくるものと思われる。

【引用・参考文献】

- 小池生夫編(2003)『応用言語学事典』研究社
- 国際交流基金・日本国際教育協会(2004)『日本語能力試験出題基準【改訂版】』凡人社
- 佐々木瑞枝(2001)『大学で学ぶためのアカデミック・ジャパニーズ』ジャパントイムズ
- 静哲人他(2002)『外国語教育リサーチとテストの基礎概念』関西大学出版部
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター指導書研究会編(2008)『直接法による日本語指導書《試用版》』東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 日本語教育学会編(2005)『新版日本語教育事典』大修館書店
- JLC日本語スタンダード研究会(2007)『JLC日本語スタンダード 中間報告2007』東京外国語大学留学生日本語教育センター
- Alderson, J. Charles (2000) *Assessing Reading*. Cambridge Language Assessment Series, Cambridge University Press
- Bachman, L. F. (1990) *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford University Press. (池田央・大友賢二監修(1997)『言語テスト法の基礎』C.S.L. 学習評価研究所)
- Bachman, L. F. & Palmer, A. S. (1996) *Language Testing in Practice : Designing and Developing Useful Language Tests*. Oxford University Press. (大友賢二他監訳(2000)『実践 言語テスト作成法』大修館書店)
- Brown, H. Douglas (2004) *Language Assessment: Principles and Classroom Practices*. Longman.
- Brown, J. D. (1996) *Testing in Language Programs*. Prentice-Hall. (和田稔訳(1999)

『言語テストの基礎知識』大修館書店)

- Brown, J. D. (Ed.) (1998) *New Ways of Classroom Assessment*. New Ways of TESOL Series II. TESOL, Inc.
- Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press. (吉島茂、大橋理枝訳編 (2004) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社)
- Davey, B. (1988) Factors affecting the difficulty of reading comprehension items for successful and unsuccessful readers. *Experimental Education* 56, 67-76.
- Davies, A. et al. (1999) *Dictionary of Language Testing*. Cambridge University Press.
- McNamara, T. F. (2000) *Language Testing*. Oxford University Press. (伊東祐郎、三枝令子、島田めぐみ、野口裕之監訳 (2004) 『言語テスト概論』スリーエーネットワーク)
- Pearson, P. D., and Johnson, D.D. (1978) *Teaching reading comprehension*. New York, NJ: Holt, Rinehart and Winston.
- Scarcella, Robin C. and Oxford, Rebecca L. (1992) *The Tapestry of Language Learning*. Heinle & Heinle Publishers. (牧野高吉訳・監修 (1997) 『第2言語習得の理論と実践』松柏社)

〈資料 1〉 JLC 試験 選択肢選択率及び識別指数 (* 正答)

問題番号	1	2	3	4	識別指数
1	0 (0.0)	0 (0.0)	*57 (96.6)	2 (3.4)	0.27
2	1 (1.7)	1 (1.7)	1 (1.7)	*56 (94.9)	0.33
3	1 (1.7)	*55 (93.2)	0 (0.0)	3 (5.1)	0.33
4	1 (1.7)	*58 (98.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0.19
5	*52 (88.1)	7 (11.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0.45
6	*56 (94.9)	3 (5.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0.33
7	*48 (81.4)	3 (5.1)	7 (11.9)	1 (1.7)	0.33
8	2 (3.4)	5 (8.5)	2 (3.4)	*50 (84.7)	0.39
9	21 (35.6)	13 (22.0)	1 (1.7)	*23 (39.0)	0.41
10	7 (11.9)	*41 (69.5)	0 (0.0)	11 (18.6)	0.51
11	6 (10.2)	5 (8.5)	*40 (67.8)	8 (13.6)	0.48
12	2 (3.4)	10 (16.9)	37 (62.7)	*10 (16.9)	0.36
13	7 (11.9)	1 (1.7)	5 (8.5)	*46 (78.0)	0.71
14	2 (3.4)	3 (5.1)	*46 (78.0)	8 (13.6)	0.39
15	32 (54.2)	*21 (35.6)	0 (0.0)	6 (10.2)	0.42
16	3 (5.1)	*53 (89.8)	1 (1.7)	2 (3.4)	0.20
17	1 (1.7)	7 (11.9)	2 (3.4)	*49 (83.1)	0.50
18	*24 (40.7)	26 (44.1)	1 (1.7)	8 (13.6)	0.41
19	*23 (39.0)	8 (13.6)	9 (15.3)	19 (32.2)	0.47
20	*56 (94.9)	1 (1.7)	0 (0.0)	2 (3.4)	0.27
21	4 (6.8)	*46 (78.0)	8 (13.6)	1 (1.7)	0.45
22	2 (3.4)	1 (1.7)	4 (6.8)	*52 (88.1)	0.45
23	*47 (79.7)	0 (0.0)	8 (13.6)	3 (5.1)	0.55
24	0 (0.0)	0 (0.0)	*57 (96.6)	2 (3.4)	- 0.19
25	19 (32.2)	10 (16.9)	7 (11.9)	*22 (37.3)	0.28
26	0 (0.0)	*42 (71.2)	6 (10.2)	11 (18.6)	0.71
27	10 (16.9)	8 (13.6)	*38 (64.4)	3 (5.1)	0.67
28	4 (6.8)	8 (13.6)	22 (37.3)	*25 (42.4)	0.27
29	5 (8.5)	7 (11.9)	1 (1.7)	*45 (76.3)	0.48
30	11 (18.6)	10 (16.9)	*33 (55.9)	4 (6.8)	0.60
31	*26 (44.1)	3 (5.1)	22 (37.3)	6 (10.2)	0.67
32	7 (11.9)	*33 (55.9)	5 (8.5)	11 (18.6)	0.82
33	23 (39.0)	6 (10.2)	8 (13.6)	*19 (32.2)	0.61
34	12 (20.3)	*22 (37.3)	19 (32.2)	3 (5.1)	0.53

〈資料2〉 期末試験 選択肢選択率及び識別指数(*正答)

問題番号	1	2	3	4	5	識別指数
1	1 (1.5)	*59 (89.4)	0 (0.0)	6 (9.1)		0.32
2	0 (0.0)	3 (4.5)	23 (34.8)	*40 (60.6)		0.70
3	5 (7.6)	3 (4.5)	*43 (65.2)	15 (22.7)		0.65
4	*63 (95.5)	3 (4.5)	0 (0.0)	0 (0.0)		0.26
5	1 (1.5)	6 (9.1)	0 (0.0)	*59 (89.4)		0.43
6	4 (6.1)	19 (28.8)	13 (19.7)	*30 (45.5)		0.63
7	4 (6.1)	*53 (80.3)	5 (7.6)	4 (6.1)		0.67
8	6 (9.1)	1 (1.5)	1 (1.5)	*58 (87.9)		0.38
9	1 (1.5)	*65 (98.5)	0 (0.0)	0 (0.0)		0.18
10	*60 (90.9)	6 (9.1)	0 (0.0)	0 (0.0)		0.43
11	*62 (93.9)	4 (6.1)	0 (0.0)	0 (0.0)		0.26
12	11 (16.7)	*55 (83.3)	0 (0.0)	0 (0.0)		0.29
13	9 (13.6)	*57 (86.4)	0 (0.0)	0 (0.0)		0.43
14	5 (7.6)	*61 (92.4)	0 (0.0)	0 (0.0)		0.26
15	*64 (97.0)	2 (3.0)	0 (0.0)	0 (0.0)		0.26
16	3 (4.5)	*58 (87.9)	0 (0.0)	5 (7.6)		0.43
17	1 (1.5)	2 (3.0)	3 (4.5)	*60 (90.9)		0.38
18	*60 (90.9)	0 (0.0)	3 (4.5)	3 (4.5)		0.38
19	1 (1.5)	1 (1.5)	*62 (93.9)	2 (3.0)		0.32
20	11 (16.7)	4 (6.1)	9 (13.6)	*42 (63.6)		0.65
21	*62 (93.9)	4 (6.1)	0 (0.0)	0 (0.0)		0.11
22	5 (7.6)	*61 (92.4)	0 (0.0)	0 (0.0)		0.38
23	15 (22.7)	*51 (77.3)	0 (0.0)	0 (0.0)		0.48
24	*62 (93.9)	4 (6.1)	0 (0.0)	0 (0.0)		0.26
25	5 (7.6)	*61 (92.4)	0 (0.0)	0 (0.0)		0.38
26	6 (9.1)	*44 (66.7)	16 (24.2)	0 (0.0)		0.77
27	5 (7.6)	2 (3.0)	*57 (86.4)	2 (3.0)		0.26
28	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	*66 (100.0)		0.00
29	1 (1.5)	*63 (95.5)	1 (1.5)	0 (0.0)	2 (3.0)	0.11
30	2 (3.0)	0 (0.0)	1 (1.5)	6 (9.1)	*56 (84.8)	0.43